連載73

内海善雄（ITU前事務総局長）の

やぶ睨み「ネット社会」論

順法意識が極端に振れる日本社会の自己復元力

最近、友人から『個人情報保護法』と題する著書が贈呈された。「昨年の同法の改正は、個人情報の保護と利活用とのバランスを取るためである」と分かりやすく解説した本である。パラパラとめくってみて、十年前の制定当時の過剰反応を思い出す。

日本人は順法意識が強いのか？

ちょうど八年間の海外勤務を終えて帰国した時であったが、どこへ行っても近況を伝えたい知人の連絡先を教えてもらえず、浦島太郎の気分を味わった。

そのうち、田舎で火事があった。有線放送が地域住民に消火活動を呼び掛けたが、「個人情報保護法のため」家の持ち主の名前を放送せず、近所の住民はどこか分からず大事に至ってしまった。

当時、同様の極端な法順守の例を多く耳にした。例えば、「個人情報保護法のため」生徒の名前や電話番号が知らせられず、運動会の中止連絡ができなかった。本人にがん告知をしたくないのに、「個人情報保護法のため」本人の同意がなければ病名を家族には言えないと拒否された等々。

個人情報保護法の非常識と思われる運用は、特に役所関係や一流企業と言われるところで頻発したように思う。最近は、あまり話題でもなくなったが、それは非常識なことが少なくなったと同時に、そのような取り扱いにも慣れて、憤りを感じなくなってきたのだろう。いずれにしても、海外の人から見れば、日本人の順法精神は尋常なものではないと映ったに違いない。

しかし、東芝事件のように、超一流企業でも意図的な粉飾決算が行われる。また、軽井沢で事故を起こしたバス会社のように、順法意識が皆無の企業もある。さらに、廃棄処分を依頼された食品を横流しするなど、悪徳非道・言語道断の商人もいる。

それだけではない。辞職した某大臣に対して、「嵌められた」「脇が甘かった」と、口利きをしたり大臣室で現金を受け取ったりという行為が、あたかも当たり前のことであって、発覚したのが不運であったような有識者のコメントもマスコミに流れる。

これではとても日本人の順法意識が高いとは言えない。

ただ、極めて例外的なことだからこそニュースになるのだとも考えられなくはない。間接的だが、そう思わせるデータもある。例えば、日本はOECD（経済協力開発機構）加盟国の中では一番に犯罪率が低いという統計である。

各国の犯罪率の比較は、国ごとに法体系が異なり、また、どうせ捕まらないと考えている犯罪を被害者がどれだけ訴えるかも異なるので難しい。効率的な比較方法として、直接、一定の期間に一定の犯罪の被害を受けたか共通の質問票で調査する手法がある。「国際犯罪被害者調査」（国連地域間犯罪司法研究所（UNICRI）及び国連薬物・犯罪局（UNODC）実施）がこの手法を採用しており、OECD諸国が参加している。

その統計では、日本はスペインに次いで、最下位となっている。残念ながら、この統計は、消費者詐欺、汚職などの知能犯的なものは含まず、盗難、家宅侵入、性犯罪などの犯罪が対象になっている。

日本は、殺人統計でも、世界の最下位である。実体験からも、世界一安全な国であると誰もが言う。これらは、日本人が法をよく守る国民だと示していると言っても間違いではなかろう。

単にマナーの問題なのか？

最近、爆買いに走る外国人観光客のマナーの悪さに辟易する話が多い。例えば、ホテルの朝食のビュッフェでは、人をかき分けて我がもの顔に食べ物をとる。彼らには行列をつくるというルールがないのかと思うほどだ。が、一方、日本人の極端な行動にも腹が立つ。

東京では、駅のエスカレーターに長い行列ができることが多くなった。駆け上がる（駆け下りる）人たちのために右側を空けるためである。駅では、「危険なので駆け上ったり、駆け下りたりしないように」と注意を呼び掛けてはいるが、空いている右側を立ったままで利用することはよほどの勇気がないとできない。多くの人は、空いている右側を見ながら我慢して行列に加わるのである。

2列で乗れば効率的でも……

先日、大山登山をしたが、下山途中に渋滞が起きた。登山者は、狭い参道（平均二メートル幅ぐらい）の左側を使用して下山していたが、遅々として進まないのである。標識もないが、自然と左側通行のルールができており、右側は登ってくる人が使用している。

しばらくの間、右側に登ってくる人がいないので、右側を下山したら、行列を作っている若者たちから大きい声でブーイングを受けた。無視して三十名ばかりの若者グループを追い抜いたら、先頭には、幼児連れの遅い下山者がいた。その幼児連れは、道を塞いでいたわけでもない。右側を追い抜けばよいだけのことであった。この大学生と思える若者たちは、何を考えて、幼児の後ろを行列したのだろうか。

柔軟な判断が不得意な日本人

どうも一般の日本人は、法やルールをよく守るが、その趣旨・目的を忘れて闇雲に従う極端な行動をとる傾向があるように思う。他の者が従うから自分も従う、人にも従わせるという、まるで知能を欠くロボットのように硬直的である。

一方、ルールを金科玉条とはとらえず、他人の目も気にせずに自分に有利な行動がとれる人もいる。しかし、彼らは法や規則を軽んじ、時には前述のような紙面をにぎわすほどの不祥事を引き起こすのではないか。

どちらも、いかにも小児的で未熟であると言わざるをえない。中庸を取るということは、日本人にはなかなか難しいことのようだ。

そんな中で、個人情報の保護一辺倒ではなく、その利活用を図るために個人情報保護法が改正され、法そのものがバランスの取れたものとなった。そうなれば、その運用も極端なことはなくなるのではないだろうか。なにしろ超真面目で融通の利かない者が多い日本だから、何事につけ規則自体を初めからある程度フレキシブルな幅のあるものにしてもらわなければ、世の中が硬直的になって住みにくくなる。行政機関や銀行などの窓口では、特にそうだ。

内海善雄（うつみ よしお）

1942年香川県高松市生まれ。東大法学部卒。東芝を経て66年郵政省（現総務省）入省。電気通信の自由化など、通信放送政策を長く担当。98年国際電気通信連合（ITU）事務総局長就任。現在は一般財団法人「海外通信・放送コンサルティング協力」理事長。IEEE名誉会員。